

機関番号：10101

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20320121

研究課題名（和文） 世界遺産知床における先住民族考古学の創成と文化資源開発

研究課題名（英文） Establishment of Indigenous Archaeology and CRM in World Heritage site Shiretoko

研究代表者

加藤 博文（KATO HIROFUMI）

北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・教授

研究者番号：60333580

研究成果の概要（和文）：

本研究の成果としては、世界遺産知床における考古学遺産を歴史文化資源として位置づけるための基盤を構築できた点にある。遺跡での体験発掘やワークショップを通じて、地域でエコツアーを企画する団体や地域コミュニティに対して遺跡の文化資源としての活用の事例を提示することができた。またアイヌ民族の歴史文化遺産としての考古遺跡を活用方法についても議論を深め、今後の保存活用の方向性を提案することができた。

研究成果の概要（英文）：

This project constructed a basic framework for utilizing the archaeological heritage of the Shiretoko World Heritage site as a historical cultural resource. Through workshops and community participation in excavations, the project was able to support organizations planning local ecotours and to develop examples of the utilization of archaeological sites as cultural resources by the local community. The project also furthered debate over ways of utilizing archaeological sites as part of Ainu historical cultural heritage and was able to suggest directions for the future preservation and utilization of culture heritage in the Shiretoko World Heritage site.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	5,500,000	1,650,000	7,150,000
2009 年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
2010 年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
年度			
年度			
総計	14,900,000	4,470,000	19,370,000

研究分野：先住民考古学、文化遺産論

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：アイヌ民族、先住民族、先住民考古学、世界遺産、文化資源、知床、オホーツク文化、地域社会

1. 研究開始当初の背景

現代社会において考古学をとりまく環境は大きく変化してきている。考古学研究の進

展と成果の提示は、歴史文化遺産の人類史的な有用性を実証してきた。これらの遺産が現在生活する我々のみでなく、未来にとっても

重要な遺産となるという共通認識を創り出してきたことは重要である。その結果として今日、歴史文化遺産は国際条約や各国の国内法によって、人類の普遍的な遺産として保護されてきている。

しかし、これまでの考古学と社会との関係に多くの課題を提起する動きも出てきた。特に研究者としての考古学者が歴史文化遺産の評価や保存管理、そのための枠組み作りの過程において、遺産が所在する地域社会との間に十分な議論を行ってきていないという批判が学会の内外からも提起されるようになった。このような考古学と社会との関係の見直しは、Public Archaeology（主に北米）および Community Archaeology（主に英国）という考古学の専門家による独占からの開放、地域社会の構成員が主体となる学問への変革という動きを巻き起こしてきている。

さらに大きな動きとして注目されるのは、先住民族と考古学との関係である。これまで主体的に歴史文化遺産の保存、管理やその計画の策定に参加することのできなかった地域社会の一つに歴史文化遺産を残した集団の後継者集団である先住民族の存在があり、彼らによる自らの歴史文化遺産への主体的な取り組み、また先住民族の視座からの歴史文化遺産の評価の必要性が出てきた。ひるがえって見ると、わが国でも先住民族としてのアイヌ民族の位置づけへの動きの中で、彼らが主体的に取り組む歴史文化遺産の保存管理が重要視されてきている。この点から見ると 2005 年に世界自然遺産として登録された知床半島の登録過程において、この地に数多くのアイヌの歴史文化遺産を含む考古学遺跡が残されているにも関わらず、文化遺産としての価値を正しく評価できなかったことが課題として指摘されるようになった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、先住民考古学 (Indigenous Archaeology) の視点と手法を応用して、北海道島における民族集団形成の過程の実態を考古学的に解明しようとするものである。具体的な研究目的は、以下の3つの柱で構成される。

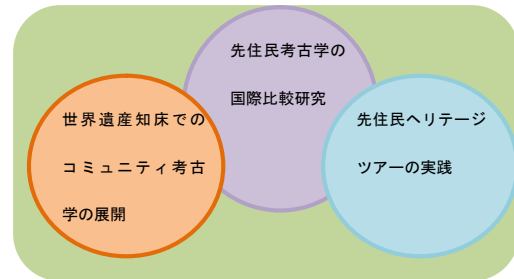
(1) 北海道島における考古学フィールドワークである、先住民族アイヌとの協同を含む先住民考古学の実践と、地域社会との連携による成果の還元をめざすコミュニティ考古学の実践を核としつつ、北海道島の先史文化の流れの中からアイヌ民族の形成過程を考察することである。

(2) 先住民考古学、北方狩猟採集民考古学において先駆的な取り組みを有する内外の研究者を招いてのワークショップを通じて、国際共同研究組織を構築することである。

(3) 考古学フィールドワークの成果と国際

的な比較研究の成果を公開する具体的な方策としてヘリテージツアーや地域での調査成果の展示活動の実践と方法論的深化を目指すことである。

本研究計画においては、上記の研究組織のメンバーを基本に、さらに北海道大学のアイヌ・先住民研究センターおよび観光学高等研究センターの組織を中心とした海外の連携研究組織との国際共同研究の体制の構築も目指した。



3. 研究の方法

本研究では、3つの研究計画に即した方法を採用した。

(1) 「知床半島における民族形成過程の考古学的研究」

計画：先住民考古学の視座から先史文化の形成と変容、そして民族形成という歴史のプロセスをチャシコツ岬遺跡群の考古学的調査を通じての検証。

方法：知床半島ウトロ地域に所在するチャシコツ岬下B遺跡の発掘調査から集落構造を把握し、周辺の遺跡群との対比、弁財チャシやその他の周辺のチャシの調査の予備的調査を進め、オホーツク文化からアイヌ文化の変遷過程に関する考古学情報の蓄積をはかる。

(2) 「先住民考古学の理論的・方法論的研究」

計画：先住民考古学の先駆的事例を有する海外の研究事例を検討し、北海道に適した先住民考古学の理論的枠組みと研究手法の開発。

方法：海外の先事例を比較検討するため、海外の先住民考古学に通じた研究者を招へいし、ワークショップを通じて我々のプロジェクトへの評価と海外事例の紹介を行う。このような交流事例による資料と情報の蓄積を踏まえて、北海道島独自の先住民考古学のあり方を探る。またワークショップには、アイヌ民族の積極的な参加を進め、若手研究者向けのレクチャーを企画推進し、新たな概念や海外の研究動向の教育普及をはかる。

(3) 「先住民ヘリテージツアーのプログラム作りと実践」

計画：世界遺産知床の自然環境に加えて歴史

文化遺産についても広く認識してもらうためのヘリテージツアーをアイヌ民族や現地NPOと協力しながら計画、実践していく。方法：海外においては、コミュニティ考古学の実践として遺跡調査や保存活用計画の立案過程に地域住民や先住民族が参画する事例が数多く知られている。本研究では、世界遺産知床を象徴する取り組みとして知床半島部の考古学遺産を中心とした先住民ガイドの養成を含むヘリテージツアーのプログラム作りや、ガイド用のハンドブックの製作、モニターツアーの実施を実験的に行う。具体的なトレイルとしては、チャシコツ岬周辺の集落遺跡や祭祀遺跡のプログラム化、弁財チャシ周辺のチャシ群をめぐるプログラムの開発を行う。

4. 研究成果

本研究の成果としては、計画の際に立てた3つの領域ごとに以下のように提示できる。

(1) 「知床半島における民族形成過程の考古学的研究」:

本研究の期間内において、主として知床半島中部、斜里町ウトロに位置するチャシコツ岬下B遺跡においてオホーツク文化期の集落遺跡構造の把握と遺跡内居住パターンの変遷の把握するべく、2008年度から2010年度にかけて考古学調査を実施した。その結果、チャシコツ岬西側の海岸線にそって広がる一体が続縄文文化からオホーツク文化、トビニタイ文化にかけて拠点的な集落や水産資源を主たる対象とした生業活動の活動拠点として繰り返し利用されてきたことが明らかとなった。一方でトビニタイ文化期からアイヌ文化期にかけての居住拠点であった痕跡は見出すことができなかった。アイヌ文化期については、チャシコツ岬上遺跡以外にも、ウトロ地域のペレケチャシ、チャシコツ岬下B遺跡よりも西に位置する弁財チャシなど一連の海岸線を見下ろすチャシ群や、フンベ湾（フンベ：アイヌ語でクジラの意味）などから先史時代とは異なる活動空間としての利用がなされてきたことを明らかにすることができた。また段丘崖上にこれまで未確認のチャシを確認するなど、13世紀以降のアイヌ民族に帰属する歴史文化遺産がこれまで以上に残されていることを改めて提示することができた。

考古学調査によって確認された遺構は、オホーツク文化期に帰属する竪穴住居址2軒、集石遺構3基、食料残渣や土器や骨角器、石器類、獣骨を集積する遺物投棄ブロック1カ所、トビニタイ文化期前半のヒグマ祭祀遺構1カ所である。これら検出された遺構や出土遺物をもとにチャシコツ岬下B遺跡における空間利用の変遷は次のように示すことがで

きる。①続縄文文化期には、時期的に限定された生業活動の拠点として断続的に利用された。②オホーツク文化期には、刻文式土器段階から貼付文土器段階にかけて集落遺跡として利用され、長期的に生活および生業活動の中心として利用された。③オホーツク文化終末のトビニタイ文化期には、集落は段丘上に移動し、海岸沿いの高地である当遺跡は、ヒグマ祭祀行為などを行う空間利用への変遷している。

特に海洋狩猟民社会であるオホーツク文化期には、このフンベ湾に面した海岸沿いに住居が海岸線に平行して配置される線状集落構造を有することが明らかとなった。

(2) 「先住民考古学の理論的・方法論的研究」:

先住民考古学という新たな領域は、日本においての先行事例が存在しない。そのため海外において先住民考古学の実践経験を有するオクラホマ大学のワトキンス教授、エリック講師、デンマーク国立博物館のウッドガード研究員、南カリフォルニア大学のフランク教授を招へいし、ワークショップを開催して先住民考古学の理論と実践に関する議論および日本における展開の可能性について議論をおこなった。ワークショップを通じて提起された点は、北海道における考古学の実践と先住民族の関わりに見られる課題が、世界的に共通の課題であり、北米、北欧、オセアニアに共有の課題として広く国際的に議論していけるという共通の認識を得ることができた。また現代考古学や応用人類学の領域で議論されるポストコロニアル的動きとしての考古学と先住民族との新たな関係の構築には、先住民族の歴史文化遺産の保存や活用への接触的な参加が不可欠であり、また非先住民族の考古学者においても先住民族の視座を踏まえた考古遺産の調査や評価が必要であること点を再認識することができた。

先住民考古学の方法論的確立のためには、先住民族を巻き込んだ野外調査研究や遺産の保存活用プログラムの構築が重要であることも確認され、実際の知床でのフィールドワークに生かすことができた点は大きな成果の一つである。

また本研究が海外の研究者とのネットワークを通じて、海外での学会において取り組みや成果を発信することができたことも大きな成果である(学会発表の③、④、⑥、⑧)。

本研究の展開を契機に、研究組織のメンバーが国際的な先住民考古学のプロジェクトに参画する機会を得たことも成果に挙げることができる。本研究活動は、カナダ社会科学人文科学研究評議会の支援を受けた大型プロジェクトである「文化遺産における知的

財産権問題 (Intellectual Property Issues in Cultural Heritage: IPinCH)」に組み込まれ、また研究代表者の加藤は、「世界考古学会議 World Archaeological Congress: WAC」の 2011 年度中間会議セッション「先住民族と博物館活動」の国際評価委員を委嘱された。このように本研究を通じて、世界的な先住民考古学と北海道島における考古学とを結びつけることができた点も大きな成果である。

(3) 「先住民ヘリテージツアーのプログラム作りと実践」:

知床半島の遺跡調査と平行して、地域社会と連携して考古遺跡を文化資源として活用するプログラムづくりを進めた。この領域の成果はいくつかに分かれる。

一つ目の取り組みは、遺跡の調査期間中に地域住民や知床を訪れた観光客を対象とした発掘体験プログラムや遺跡を会場としたワークショップである。2008 年から 2010 年の毎年 9 月に開催した本事業は、地元の小中学生と父兄および教員を中心に、また観光客を含めた参加者を得ることができ、盛況であった。最大の成果は、地元住民が遺跡を自らの手で発掘調査し、出土遺物に触れる経験を通じて、地域の歴史文化遺産を「大切な存在」から「楽しい空間」へとイメージ転換をはかった点にある。遺跡の重要性は認識されてきたが、身近にあっても自ら楽しむことができる場であることが理解された点は大きい。

二つ目の取り組みは、出土資料や遺跡の展示事業である。斜里町ウトロ地域は、世界遺産知床の観光の拠点であり、またコアミュージアムの機能を有している。しかし、現状では、歴史遺産に関する情報は発信されていない。本研究では、学生を主体として地域の遺産から出土した考古資料の速報展示と解説をおこなった。2008 年から 2010 年までの 3 年間で計 551 名 (内 231 名が道内観光客、320 名が道外観光客) の訪問者のアンケートデータを集計することができた。このアンケートデータから具体的に観光客が世界遺産知床に対して抱くイメージ、現状への不満や期待、ニーズを明らかにすることができた。

三つ目の取り組みは、ウトロ地域におけるヘリテージツアーのトレイル作りとモニターツアーの実施である。すでにチャシを利用した先住民エコツアーは、地元の NPO が企画するアイヌ民族のガイドによるコースに組み込まれていたが、我々が確認した新規のチャシやチャシコツ岬下 B 遺跡もガイドコースの中に組み込まれるようになった。我々の研究においてもウトロ地域をめぐるトレイルを設定し、地元住民や宿泊施設スタッフを交えてモニターツアーを実施した。従来のトレイルに加えて歴史文化遺産が加わることに

より、トレイルに歴史的重層性が増すこと、また参加者に自然環境への関心のみではなく地域の歴史への関心が芽生えるなど成果を上げることができた。トレイルのモニターツアーについては、実験を更新中であり、新たな成果と工夫を追加中であり、その成果の一部は映像データとして 2011 年度中に公開する予定である。

成果のまとめ

上記のように 3 つの領域それぞれに成果を挙げることができた。一方でそれぞれの課題を統合し、更に深化させていく必要がある。また今回の研究計画でカバーしきれなかった近世以降の歴史文化遺産についても、本来は組み込んでいく必要がある。先住民考古学という取り組みが日本、北海道において定着するかどうかは、現段階では定かでない。日本考古学の枠組みとも関わる課題を内包しており、研究者ごとの反応は多岐にわたると推定され、コンセンサスを得ることは容易ではないとおもわれる。一方で現段階の取り組みを国内外に発信することができたこと、地域を巻き込んだ取り組みを実践できたことは本研究の最も重要な成果であるといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- ① 佐藤孝雄、人と自然の糾う歴史、三色旗、査読なし、747、2010、8-15
- ② M. Hudson, M. Aoyama, M. Diab & H. Aoyama, The South Tyrol as occupationscape: occupation, landscape, and ethnicity in a European border zone, *Journal of Occupational Science*, 査読有, 17(4), 2010, (published online)
- ③ KATO Hirofumi, Whose archaeology?: Decolonizing Archaeological Perspective in Hokkaido Island, *Journal of the Graduate School of Letters Hokkaido University*, 査読有, vol.4, 2009, 47-55
- ④ 加藤博文、先住民考古学という視座-文化遺産・先住民族・考古学の課題-, 北海道考古学、査読有、45 号、2009、31-44、2009
- ⑤ M.J. Hudson, M. Aoyama, Hunter-gatherers and the behavioral ecology of human

occupation, *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 査読有, 76(1), 2009, 48-55. 2009

- ⑥ 加藤博文、文化遺産は誰のものか：考古学と先住民族の新たな関係の構築のために、モーリ、査読なし、21号、2009、52-54
- ⑦ 加藤博文、公共性の考古学 (Public Archaeology) という取り組み：歴史の主体と研究倫理という課題、北海道の教育、査読なし、2009、248-249
- ⑧ 加藤博文、サンクト・ペテルブルク大学における古民族学派：帝政ロシアの先史考古学とФ. Д. ヴォルコフ、北海道大学文学研究科紀要、査読なし、第125号、2008、33-55

[学会発表] (計9件)

- ① 岩波連、大西凜、加藤博文、知床半島部における考古学調査報告：チャシコツ岬下B遺跡／以久科海岸北遺跡、2010年度北海道考古学会遺跡報告会、2010年12月25日、北海道大学
- ② 加藤博文、誰のための何のための研究か、日本文化人類学会公開シンポジウム「人類学とアイヌ研究、2010年11月13日、北海道大学
- ③ KATO Hirofumi, Community-based case study for Ainu in Hokkaido, Japan, IPinCH Community-based Heritage Research Workshop, 2010.10.15 and 16, Vancouver, Canada
- ④ KATO Hirofumi, A New Age for the SAA: International Indigenous Archaeology”, 75th Anniversary Meeting of the Society for American Archaeology, 2010. 04. 14-18, St.louis, Missouri, USA
- ⑤ 加藤博文・佐藤孝雄・Hudson Mark・徐光輝・山村高淑・小野有五、先住民考古学の創生と知的財産権問題－北海道における事例研究－、第75回(2009年度)日本考

古学協会総会、2009年5月31日、早稲田大学、東京

- ⑥ KATO Hirofumi, Whose World Heritage and Indigenous Peoples?: Issues Surrounding World Heritage in Japan, The Society for Applied Anthropology 69th Annual Meeting, 2009. 03.17-21, Santa Fe Convention Center, Santa Fe, New Mexico, USA
- ⑦ 佐藤孝雄、知床におけるヒグマ儀礼の痕跡、知床博物館30周年記念フォーラム『先人の集まりしウトロ遺跡を語る』, 2008. 09. 06、ゆめホール知床公民館ホール
- ⑧ KATO Hirofumi, World Heritage and Indigenous Archaeology in Hokkaido”, 6th World Archaeological Congress, 2008. 06.29-2008.07.04 University College of Dublin, Dublin, Ireland
- ⑨ 佐藤孝雄、アイヌ考古学の歩みとこれから、北海道大学アイヌ・先住民研究センター夏季シンポジウム『アイヌ研究の現在と未来：第I部』, 2008. 06. 29、北海道大学

[図書] (計8件)

- ① 菱島栄紀編、アイヌ史を問い直す、勉強出版、2011、213
- ② KATO Hirofumi, Whose archaeology?: Decolonizing Archaeological Perspective in Hokkaido Island”, *Reader on Indigenous Archaeologies*, eds. M. Wobst, S. Hart and M. Bruchac, Left Coast Press, Walnut Creek, CA. pp.314-321, 2010.
- ③ 加藤博文、第2章 知里真志保の描いたアイヌ学の構図、知里真志保の人と学問、北海道大学出版会、2010、23-42
- ④ 加藤博文、アイヌ研究において考古学の果たすべき役割とは何か、北海道大学アイヌ先住民研究センター編、アイヌ研究の現在と未来、北海道大学アイヌ・先住民研究センター年報、北海道大学出版会、2010、100-113
- ⑤ 佐藤孝雄、“アイヌ考古学”の歩みとこれから、北海道大学アイヌ先住民研究セン

ター編、アイヌ研究の現在と未来、北海道
大学出版会、2010、72-93

- ⑥ M. Aoyama & M. Hudson, Task, occupation
and landscape. In *Studies of Landscape
History on East Asian Inland Seas*, ed. K.
Makibayashi & M. Uchikado, Kyoto:
Research Institute of Humanity & Nature.
pp. 3-12, 2010
- ⑦ 加藤博文、旧ソヴィエト考古学における
民族起源論の系譜、高倉浩樹・佐々木史
郎編 ポスト社会主義人類学の射程：人
類学理論と民族概念・社会変容の文脈、
国立民族学博物館、2009、111-134
- ⑧ 佐藤孝雄 2009 「知床のヒグマに関わる
文化財」知床町立知床博物館編しれとこラ
イブリー9 知床の考古、北海道新聞社、
2009、204-209

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 博文 (KATO HIROFUMI)
北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・
教授
研究者番号：60333580

(2) 研究分担者

山村 高淑 (YAMAMURA TAKAYOSHI)
北海道大学・観光学高等研究センター・准教
授
研究者番号：60351376

小野 有五 (ONO YUGO)
北海道大学・大学院地球環境科学院・教授
研究者番号：70091890

佐藤 孝雄 (SATO TAKAO)
慶応義塾大学・文学部・教授
研究者番号：20269640

蓑島 栄紀 (MINOSHIMA HIDEKI)
苫小牧駒沢大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：70337103

ハドソン マーク (HUDSON MARK)
西九州大学・リハビリテーション学部・教授
研究者番号：20284052

徐 光輝 (JYO KOUKI)
龍谷大学・国際文化学部・教授
研究者番号：70278498

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

松田 功 (MATSUDA ISAO)
斜里町知床博物館・主幹

布施 和洋 (FUSE KAZUHIRO)
北海道大学・大学院文学研究科・大学院生

権平 拓也 (GONDAIRA TAKUYA)
北海道大学・大学院文学研究科・大学院生

フランク ゲーリャ (FRANK Gelya)
南カリフォルニア大学・人類学部・教授

ワトキンス ジョー (WATKINS Joe)
オクラホマ大学・ネイティブアメリカンプロ
グラム・教授

エリック キャロル (ELLICK CAROL)
オクラホマ大学・ネイティブアメリカンプロ
グラム・講師

ウドウガード ウーラ (UDGAARD ULLA)
デンマーク国立博物館・研究員

ニコラス ジョージ (NICHOLAS GEORGE)
サイモン・フレーザー大学・考古学部・教授